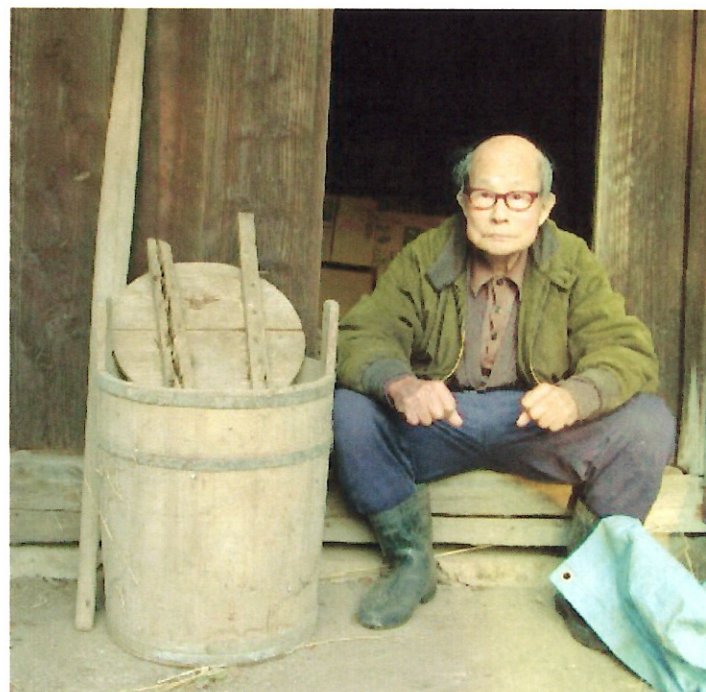




⑤鈴木美郎さん宅の肥溜めには昭和7年という「銘」がある。近所には屋根付き⑥も

人糞汲み 東京 下町まで

大家は店子の尻で飯を食い江戸の川柳である。大家さんは店子の糞尿を農家に売って儲けていたという。昔から糞尿は大切な肥料だった。逆井でも東京の向島とか四つ木にまで、牛や馬に肥え桶を曳かせて人糞収集に行った。牛や馬はいなくなり、化学肥料の時代になったが、農家の納屋には肥え桶がしまわれており、風雨にさらされつ放しの肥溜めも残っていて、糞尿を大切にしていた昔をしのぼせる。



日暮富雄さんは、納屋の奥から肥え桶を出し、昔のことを話してくれた。下町の糞尿が、この肥え桶の中で揺られながら運ばれてきた。「肥え桶よ、ご苦労さまでした」

牛や馬に肥え桶ひかせて一日がかり

朝三時起き、朝飯を食べ、馬には飼料葉を与えて四時出発、葛飾橋あたりで太陽が上がる。曳くのは牛もおり、出発は同じでもばらばらになる。終戦直後の話である。葛飾橋には小屋を作って巡査が二人おり、食物とみれば取り締まる。糞尿のお礼には、サツマイモやジャガイモを積んでいくから、それを隠す。四時間たつて八時頃、四つ木に到着、疎開や買出しなどで留守が多い。汲み入れに一時半、金町の桜の土手で昼食、昼寝、夕方には帰り着く。タイヤが二つの大きめのリヤカーには肥え桶が八個載る。はねるから藁を持つてゆく。この八個分で十軒の糞尿を収集できたそうである。東京人の糞尿は窒素分が多い。肥溜めに一週間置き、発酵させてから畑にまく。一か月に一度、世話人から連絡が来ると出かける。台風が来て溢れ出したという連絡が来る。そんな薄まっている。それでも付き合いだから出かけて、途中でみんな捨ててきたこともあった。終戦後二年もたつと、業者が車で収集するようになり、いまのN T Tのところと共同の肥溜めができ、それを利用した。江戸川をのぼって、下肥船が、松戸の主水（もと）まで糞尿を運び、これを買いに行ったこともあったという。